

縁

岐阜県立関高等学校一年（岐阜県）

西野 華容

私の住む町には正眼寺という古い大きなお寺がある。ここは綺麗に整備された庭園があり自然が豊かで、春には桜、夏には新緑、秋には紅葉が美しい。コロナで休校中、よく散歩に出かけた私のお気に入りの場所だ。

小学校四年生の時、祖母に連れられ正眼寺のイベントに参加した。そこで私は、初めて茶道というものに出会った。畳敷きの小さな和室で苦いお茶と甘いお菓子をいただくイベントだった。初めて入るお茶室は、ピンと張りつめた空気が流れ、畳の清しい独特な香りが漂っていた。よく知っているはずの正眼寺にこんな場所があったのかと驚くような非日常感溢れる空間だった。緊張なのかりラックスなのかよくわからない不思議な感覚に襲われたことを覚えていて。先生が優雅な手つきでお茶を点てているのをぼんやりと眺める。なんだか眠くなってくる。これが私と茶道との出会いだった。その時は、なんとなく落ち着くとかく

いの印象しかなかった。その出会いから数年間、私の生活に茶道が現れることがなかった。

中学を卒業するとき、友人と京都に卒業旅行へ出かけた。着物を借りて着付けをしてもらい、町を散策した。着物を着ると自然と凛とした美しい立ち振る舞いになった。そして日本の文化ってかっこいい、習う機会があれば挑戦したいと思った。

高校に入学し部活動見学をしていると、茶道部があることを知った。私が迷うことなく入部した。本格的に部活動が始まりお茶室で畳のにおいを嗅ぎながら正座していると、入学直後でまた学校生活に緊張していた心と体がほぐれていくのがわかった。畳の上の歩き方から始まり、お辞儀の仕方、お箸の持ち方、正座の仕方、お菓子の食べ方、そこで習うこと全てが驚きと発見の連続で楽しくて仕方がなかった。今年の夏休み、浴衣を着て友人とお祭りに行くとき、自分で着付けをしてみた。友人はそのことに気付き褒めてくれた。礼儀作法や着付けなど、できることが増えていくと自分に自信が持てるような気がした。

私は茶道を始めてまだ四カ月なので、お作法の奥深さなど分からない。本格的なお茶会を催したこともないので、お客様のもてなし方もよくわからない。だから先生や先輩方からいろんなことを学んでいきたい。

私の高校生活は始まったばかりで、将来の志望校は決

まっぴいないし、就きたい職種もまだわからない。しかし、一つだけ決まったことがある。私は茶道を通じて正しい礼儀作法だけでなく、相手のことを思いやってもてなす心や、当たり前のことを当たり前にできる心を持った素敵な大人になろうと決意した。また、後日正眼寺での経験をお話したら、鵬雲斎大宗匠との関わりをお聞きし、もっと裏千家を知りたいと思った。そして裏千家に出会えたことを嬉しく、誇りに思う。